

第267回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（20）

第9章 「日本ルネッサンス史論」への道 (1942-1966)

3 日本捕鯨史話と葛飾北斎論

福本は書斎の人ではない。敗戦によって自由の身になると多方面で活躍する人たちを訪ねている。1946年に入ると、数回にわたり尾崎放哉（1885-1926）、種田山頭火（1882-1940）が師事した荻原井泉水（1884-1976）を、また北大路魯山人（1883-1959、陶芸、料理、書道など多方面で活躍）を北鎌倉に訪問した。東京用賀に出かけ竹越與三郎と『日本ルネッサンス史論』第2次草稿について話した際、元遺山（1190-1257、女真族王朝・金の詩人）の詩句「飢腸、奇策を出す」と喜ばれた。14年の獄中で「飢えた腸から」にじみ出た產物、という意味である。

娘の逸子は回想する。

父は行動的な人でした。当時旅費がよくあったと思います。マニュファクチャの研究を父は足で歩いて書いています。越中富山だって、太地浦の鯨だって、和歌山の山林地主のところや、壱岐、対馬まで行っています。あの頃、父はどうやってお金をつくったのか私は疑問です。

（前掲「父・福本和夫と生きて」、『裸像』所収、249頁）

福本は和歌山の太地浦のほかに千葉外房の乙浜、長崎の生月島など全国各地の捕鯨基地を実態調査する。その成果が『日本捕鯨史話—鯨組マニュファクチャの史的考察を中心に』（法政大学出版局、1960年、『福本和夫著作集 第7巻 カラクリ技術史 捕鯨史』こぶし書房、2008年、601-817頁、所収）である。

福本は漂流船史話を研究しているときに捕鯨史に着眼した。神田や本郷の古書店、京都府立図書館、和歌山県立図書館などを訪ねる。生月島の捕鯨と鯨処理を描いた『勇魚取絵詞』（1832年）を閲覧し、1838年に釜石沖から漂流してアメリカの捕鯨船に救われハワイ、カムチャツカ、オホーツク、アラスカを経て択捉島に帰着するまでの5年間の口述記録『蕃談』の写本を借りるなど資料収集に努める。1945年の2月上旬までには日本捕鯨史を一応は書き上げた。空襲によって爆弾が落ちたときは真っ先に持ち出せるように書き溜めた原稿を玄関に置いていた。

福本は旧友の木下輝次（1896－1989、河上肇の門下生、1926年に法政大学教授を解職）に渋沢敬三が主催する水産史研究室（日本常民文化研究所）を紹介される。61種類にも及ぶ肉筆の絵巻物、参考資料（前掲xxi－xxv）を利用することができた。実地調査（その一端は前掲236－238頁）の結果を踏まえて草稿を何度も書き直してついに1960年に完成する（苦心談については『霧笛』314－317頁を参照）。挿入図版が80枚以上もある本書出版の世話をしたのは東京大学退官後に法政大学教授を務めていた宇野弘蔵であった（「あとがき」、前掲282頁）。

本書は副題が示すとおり「鯨組マニュファクチュアの史的考察」である。

わが沿岸の網取捕鯨業は、その規模において、徳川時代、最大のマニュファクチュア（工場制手工業、工場制機械工業の前段階—岩田注）であった。鯨組のあるじは、すなわち、捕鯨事業の経営主は、その財政勢力、その生活、一国一城の大名に比せられ、その下に使われる刃刺（船頭）でさえ、7カ月大名とよばれたほどであったにかかわらず、それが、くわしく世にしらされていない。捕鯨のことについて、書かれた書物は、すくなくないが、いずれも、欧米式捕鯨法に転換以後のことには、ほとんど終始し、それ以前の日本捕鯨法の時代については、せいぜい1、2頁の記述で、お茶をにごしているのが現情である。（『霧笛』316－317頁）

「独立のよみものとして……たれにもやさしく、しかもおもしろく読めて、日本捕鯨史の全分野が一望のもとに展望できるよう」（前掲『日本捕鯨史話』272頁）とあるように、刊行から60年以上経った今でも面白く読める本書の構成は次のとおりである。

第1章「鯨の生態と効用」、第2章「わが捕鯨方法発展の5段階」、第3章「欧米人・中国人・アイヌ人の捕鯨と比較して」、第4章「わが沿岸網取捕鯨業の発展」、第5章「土佐津呂組の捕鯨」、第6章「ノルウェー式捕鯨法が何故まず日本海方面からはじまったか」、第7章「わが捕鯨図説の4系統」、第8章「我が漂流船と英米遠洋捕鯨船との接触」、第9章「近代式捕鯨への過渡期」、第10章「近代式沿岸捕鯨と母船式遠洋捕鯨」、第11章「研究余話13章」、第12章「本書の特色は日本ルネッサンスとマニュファクチュアの見地からした総合・比較研究にある」、追補「生月島の勇魚取絵詞と露伴の小説いさなとり」。

「本書を通読されたかたには、すでにご理解ねがえたはずと思うが」（前掲269頁）と書き出す第12章は「総合・比較研究」の

方法論を明確に提示する。最終章ではなく第1章に置くべき議論である。

日本ルネッサンス史と日本マニュファクチャ史はそれぞれ総合史と部分史という密接不可分な関係にある。捕鯨を例に挙げるならば、「総合」とは長州、土佐、何々組の捕鯨記録を羅列するではなく体系づけた捕鯨史を構築すること、「比較研究」とは欧米、中国、アイヌなどを比較して日本捕鯨の特徴を考察することである。日本マニュファクチャ一般にまで拡げると、各マニュファクチャ発生にまで遡りそこからいかに飛躍的に発展していったか、明治維新後に各マニュファクチャがいかに近代機械化したか（しなかったか）の経緯を究明することである。

アイヌの捕鯨法への言及（前掲83—85頁）、捕鯨図説の4系統とその年表（紀州系、小川島系、大槻系、生月系、前掲166—168頁）など興味深い論点はいくつもある。マニュファクチャの観点から本書を読むとき日本捕鯨史への最も大きな貢献は発展段階を5つに分類したことであろう。「日本捕鯨の発展段階年表」（前掲37—38頁）を抜粋すると次のようになる。

第1段階（沿岸でとり陸上で処理、弓または網）

弓取法による捕鯨時代（例 丹後伊根湾の網取法）

古来より元龜ないし慶長年間（1570—1615）まで

第2段階（沿岸でとり陸上の納屋で処理、モリ専用）

突取法による捕鯨業時代（三河・尾張のちに紀州太地浦へ）

元龜ないし慶長年間から延宝3年ないし5年（1675—1677）に至る70年ないし100年間

第3段階（沿岸でとり陸上の納屋で処理、モリと網を併用）

網取法による捕鯨業時代（太地浦から土佐、九州へ）

延宝3年ないし5年から明治20年ないし27年（1887—1894）に至る220年間

第4段階

モリと槍を撃ち込むボンブランス銃の併用による捕鯨業時代

明治20年ないし27年から明治32年（1899年）までの約10年間

安政5（1858）年にボンブランス法によるアメリカ捕鯨船が箱館に来航、明治27年に閑沢清明（1843—1897、水産官僚）が実地に試用

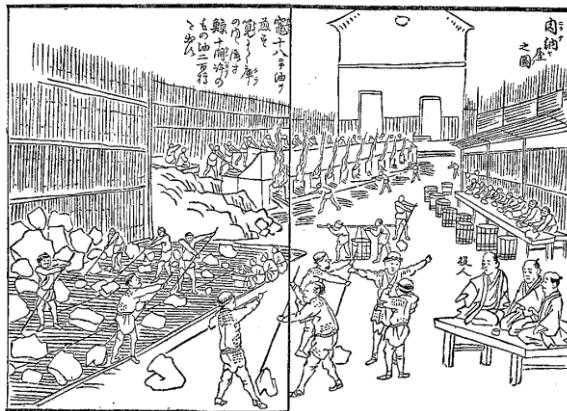
第5段階（遠洋捕鯨、処理は沿岸陸上または洋上捕鯨工船）

ノルウェー式捕鯨砲（モリを大砲で撃つ）による捕鯨業時代

明治32年、日本遠洋捕鯨会社（1899年創業、1930年代に日本水産（現ニッスイ）、林兼商店（現マルハニチロ）の吸収）が初め

て捕鯨砲を採用して遠洋に乗り出す。1939年の南氷洋捕鯨船隊数はノルウェー12、イギリス9、日本6、ドイツ5。

江戸時代の捕獲鯨肉解体は処理工場（肉納屋、図版は前掲119頁）で行われていた。捕鯨業に従事していた太地浦の戸数は、延宝5（1677）年の網取法の創始によって寛文年間（1661-1673）130戸から貞享年間（1684-1688）471戸と20年間に4倍に飛躍的に増加する（前掲94頁）。捕鯨業は精銅や製鉄に匹敵するほどの大規模マニュファクチャであった。



肉納屋の内部（司馬江漢著）

捕鯨史の研究者である中薦成生は『日本捕鯨史話』が提示した5段階の発展モデルは捕鯨史の概要把握に大いに役立つとしたうえで福本モデルの根本的な問題点を指摘する。一元的な単線モデル、単線的な時代区分は実際の捕鯨史には当てはまらない部分が多いという。

……例えば幕末から明治30年代にかけてなどは、突取、洋式突取、網掛突取、断切網、定置網、銃殺、ノルウェー式以外の砲殺など様々な捕鯨法が行われていて、主要な捕鯨法を見極めるのも難しい。結局、ある時代を一つの捕鯨法の名称を以て紹介するというスタイル自体に無理があり……。（「第7巻月報」所収、「福本和夫氏の日本捕鯨の発展段階モデルについて」6頁）

中薦は突取、網取、銃殺、砲殺の4分類それぞれを細分化する方法論を提唱している。「こうして自分なりのモデルを呈示できたのも、5段階の発展段階モデルという乗り越えるべき「壁」があつたがためと、福本氏に心から感謝している」（前掲7頁）と学恩を語る。研究は常に乗り越えていくものである。福本は満足して微笑んでいるのではないか。

福本が葛飾北斎（1760-1849）に注目するようになったのは千葉刑務所に在獄中の1941年8月27日であった（第8章第4節参照）。倉吉高等女学校に通う逸子の担任で国漢の先生が送ってくれた『富嶽三十六景』（1831-1834）のみごとな紅富士『凱風快晴』に図のような2つの2等辺三角形を発見する

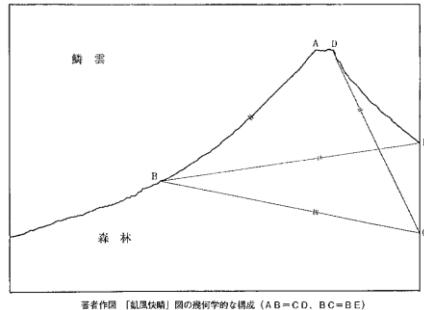
（前掲『福本和夫著作集 第5巻 葛飾北斎論』34頁）。

それ以降、北斎の技法（手技=メチエ）に魅せられて数々の葛飾北斎論を発表する。刊行順に並べると、『北斎の研究』（北光書房、1944年）、『北斎の芸術』（北光書房、1947年）、『北斎と印象派の人々』（彰考書院、1947年）、『北斎と写楽』（日高書房、1949年）、『北斎と印象派・立体派の人々』（昭森社、1955年、立体派とはキュビズムを指す）、『北斎と近代絵画』（フジ出版社、1968年、フジ出版社は息子・邦雄が創業）となる。これらの北斎論はパリ留学中に前田寛治から学んだ芸術論、絵画論（第2章第4節参照）なくしては完成しえなかつたであろう

19世紀後半から20世紀初頭、フランスを中心にヨーロッパでは「ジャポニズム」（日本趣味）が流行する。20世紀になると下火になるとはいえ、工芸における「アール・ヌーボー」の作品群は制作され続け、ドビュッシー『交響曲・海』（1905年初演）の初版楽譜の表紙を飾ったのは北斎『神奈川沖浪裏』の大浪であった。となると、福本の北斎論はジャポニズムの影響を受けたペダンティックな絵画論を予想してしまう。

……『北斎漫画』（1814-1878、全15編、4000を超える図版—岩田注）は、むしろ、あらゆる姿態を、しかもその動態において如実にとらえるを中心とした森羅万象を網羅した点で、まさしくルネッサンス的な絵画の百科事典とも呼べるべきものである。フランス近代の印象派、わけてもドガとゴーガンにかけて『北斎漫画』がいかに大きな影響を与えたかは、拙著『北斎と印象派・立体派の人々』（1955年）にくわしく具体的に指摘し論証しておいた。

人間主義で一貫した『北斎漫画』を、こんにち日本画壇の支配的傾向となっている人間不在の絵画と対比して、私は、古い言葉だが、まことに隔世の感なきをえない。（『日本ルネッサンス史論—1661-1850年に至る日本ルネッサンスの比較・総合研究』総



論編』東西書房、1967年、『福本和夫著作集 第9巻 日本ルネッサンス史論』こぶし書房、2009年、所収、667頁)

北斎の方法論、ヨーロッパの芸術家に与えた影響をバランスよく論じた『北斎と印象派』（前掲『福本和夫著作集 第5巻』165-275頁、443-455頁、所収）では、セザンヌ（1839-1906）、クールベ（1819-1877）、ドガ（1834-1917）、ゴーガン（1848-1903）、ゴッホ（1853-1890）、ピカソ（1881-1973）ら巨匠たちが取り上げられており、全編が日本ルネッサンス史論と直接的に関係しているわけではない。それらの画家論は福本が美学・芸術学の素人であることを忘れさせるほどである。ここでは、北斎の方法論に限定して論じることにする。

第1に「規矩方円説」である。「規」は「ぶんまわし」（コンパス）、「矩」は「角度直尺」（目盛りの付いたL状の工具）を指す。福本は円と方形で描く幾何学的構図法を規矩方円説と呼び、セザンヌも同様の手法をとっていると指摘する。代表例は



富嶽三十六景の『尾州不二見原 桶屋の不二』（『福本和夫著作集 第5巻』34頁）である。

第2に「森羅万象主義」と「画境転心説」である。

……『北斎漫画』最終編の東壁堂主人片野東西郎（1845-1894、画商、出版業一岩田注）の序文にいわく、

「北斎翁の漫画は予が家の蔵版なり。この編画く所、山水草木鳥獸虫魚は固より論なく、人物の如きに至っては、則ち農画の稼穡、百工の事業、凡そ覆載の間における森羅万象は一網も遺す無し。蓋しこの冊子これが濫觴たり」

思うにこれ、『北斎漫画』の森羅万象主義を解説して最も要を得たるに近きもの。

（前掲191頁）

時々刻々変化する森羅万象と向き合うのであれば、「画する品によりて心も亦転すべきもの」（前掲185頁）である。この「画境転心説」は「ものそのもの」に迫る唯物論的な合理的態度であるといえよう。

第3に「真行草三体説」である。真行草とは書道における楷書、行書、草書である。書道と同様に画風にも真行草の三体がある。

すなわち、真にして、いかなる細微の機構をもコツコツと精細正確にその骨格を失うことなく描写しうると共に、いわゆる奔馬の空を往くがごとく、草にして走ることも自在無碍な北斎であった。

(前掲193頁)

規矩方円説、森羅万象主義、画境転心説、真行草三体説は必ずしも北斎に限った方法論ではないであろう。しかし、それらの手法を用いて他の追随を許さない境地に達した北斎の奔放な精神にはまさしく「狂」の言葉がふさわしい。

『日本ルネッサンス史論』が完成した2年後の『北斎と近代絵画』(前掲『福本和夫著作集 第5巻』91-164頁、所収)には『北斎漫画』とマニュファクチュアの関係に言及した箇所がある(前掲141-142頁)。

人間の姿態を動的に捉える北斎が労働する人間の動きを描くのは必然である。『北斎漫画』の一大特色は精細な労働図、生産技術図が収録されていることである。それはあらゆる生産部門に及ぶ。

灌漑用水車、稻刈・稻扱、糲の調整、稻叢の結び方と掛け方、芋洗い、干瓢製造、砂糖の製造工程、養蚕と製紙、機織、砧打ち、糸はえ、網組み、元結扱き、紺屋、木挽、樵夫、伐木流送、岩茸取り、木地屋の轆轤細工、木地挽き、瓦焼き、壁塗りと漆喰製造、鉱山採掘作業、狩猟、漁獵、塩焼き、笠張り、車作り、船大工、鍛冶屋、等々。

福本は「北斎の生産技術図も、マニュファクチュア部門に注意を向けて、これを描き出すまでにはいたっていない。そこに北斎の限界があったことを、見のがせない。」(前掲142頁)と論評する。北斎にマニュファクチュアの視点を求めるのは酷であろう。

浮世絵研究者の築比地仲助(1886-1981、幸徳事件に関与)は北斎と写楽の幾何学的構図法を比較した『北斎と写楽』(前掲『福本和夫著作集 第5巻』307-439頁、所収)に跋文を書いた。

北斎の画論を始めて(「初めて」か—岩田注)体系づけた上、レオナルド・ダ・ヴィンチ並びにポール・セザンヌの画論と仔細に比較研究しただけでも、本書における著者の業績は北斎研究に新時代を画したものといってよい。

(前掲437頁)

福本は築地の跋文を受けた「後記」で、「北斎の画論が決して狭隘固陋、独尊排他主義の所謂一城一国なものではなくして、実際に世界に通ずる知性的、科学的、数学的なものであった」（前掲438頁）と世界美術史における北斎の貢献度を確認している。

『北斎と近代絵画』には1946年6月5日の日付をもつ短文「1948年の北斎百年祭と私」（前掲294-295頁）が収録されている。

1948年は北斎の百回忌に当たっていた。『北斎の藝術』を1947年6月に、『北斎と印象派の人々』を1947年12月に発表したのはそのためである。福本は日本浮世絵協会に対して百年祭を提案する。協会が中心となって各地で展覧会が開催された。東京文化財研究所ホームページによると、1848年4月1日から4月30年まで「北斎百年祭記念浮世絵展覧会」（国立博物館主催、朝日新聞社後援）が国立博物館で開催され、鎌倉、酒田、新津、京都、大阪、神戸、福岡などの博物館、美術館で世界的に影響を与えた北斎の偉業を顕彰したという。

雑誌では『国華』（岡倉天心らが1889年に創刊、現在まで1560号以上を刊行）などで特集号が組まれ、「北斎100年祭記念切手」（富岳三十六景の「山下白雨」）が発売されている。また、1948年4月にはパリの「グラン・パレ」で北斎展が開催された。「日本の画家にして、外国で百年祭を祝われたものは、おそらく北斎がはじめてであろう。」（前掲274頁）

『北斎と印象派の人々』所収の「ゴッホ、クールベと前田と海」（1947年6月9日の日付）からは親友の前田寛治に対する深い哀切の念が伝わってくる。前田はゴッホに私淑し、その後、クールベの手法に学んで「前寛ばり」と呼ばれる独自の画法を編み出した（第2章参照）。

……ゴッホの点描法が全くわが北斎のそれに由来し、クールベの海の連作もまた、わが怒濤の画家北斎の影響になったものであることを前田は知らなかった。否、北斎その人について、殆ど全く知るところなかったのである（前田が学んだ東京美術学校の創設に尽力した岡倉天心は大の浮世絵嫌いで有名だった—岩田注）。もし前田にして、北斎をよく知っていたら、（中略）もし夙に北斎の「神奈川沖浪裏」や「総州銚子」の怒濤図をよく知悉していたら、前田が海に出るのにはわざわざクールベなどに俟つまでもなかつたかも知れぬ。それはとまれ、前田がその生涯の最後において、ついに海の大傑作を出してくれたことを、私は限りなくうれしくかつまことに意義深いことに思わずにはいられない。

（前掲454-455頁）